

Title	共同的思考の産物と効果 : 神戸市看護大学でのワークショップから
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 7 P.24-P.30
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/7343
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

共同的思考の産物と効果

神戸市看護大学でのワークショップから

堀江 剛

今年の10月14-15日の二日間、私たちは神戸市看護大学の学生たちとともにSDを行った。臨床哲学研究室では、ヨーロッパでのワークショップの経験をもとに、1999年秋から数回のSDを試み、その実施の仕方やファシリテートの仕方などについて試行錯誤を重ねている。今回は初めての研究室外部の人々を対象にしたSDであった。以下ではその報告と若干の考察を行う。

1. 準備作業

今回の実施に当たって私たちは「ソクラテック・ダイアローグ」という名称を避け、「臨床哲学ワークショップ」という名前を使用した。これは、哲学に関わる固有名(ソクラテス)や一対一の議論を想像させる「ダイアローグ」という言葉を出して参加者を混乱させるよりは、むしろSDが一つの「グループ討論のワークショップ」であることを端的に分かってもらおうとしたからである。しかし実際に行ったのは、私たちがヨーロッパで経験したSDとルール上全く同じものである。テーマその他の条件は以下の通りであった。

テーマ：他人を理解するとは？

参加者：神戸市看護大学学生14名(学部生、大学院生)と中岡

進行役：寺田、堀江、大北(三つのグループに分かれる)

日程：2000年10月14-15日

一日目

12:00-12:50 イントロ・グループ分け

13:00-15:00 セッション1

15:00-15:45 休憩

15:45-17:45 セッション2

二日目

10:00-12:00 セッション3

12:00-14:00 昼休み

14:00-16:00 セッション4

16:00-16:45 休憩(及び予備延長時間)

16:45-17:45 全体での反省

実施に先立つ三ヶ月前(間に一ヶ月半の夏休みを挟む)に、私たちはSDを紹介する文章を配布し、参加学生を募集した。この文章は、私たちのこれまでのSD経験やSDに関する文献、また参加者が看護大学の学生であることなどを考慮して作成した。またそれは、私たちが現時点で考えているSDの意義を要約したものである。ここにその全文を掲載しよう。

日頃私たちが行っていること・考えていることの中には、様々な「常識」や"assumption"(仮定・推測・態度)が潜んでいます。また、他人との考えの違いを思い知らされることもあります。臨床哲学ワークショップは、そうした事柄を、参加者自身の具体的な経験を通じて掘り下げるとともに、一定の合意点(あるいは妥協点)をつくり出していく試みです。

それは一方で、自分の考えや気になっている事柄を、他人との意見の相違や共感を交えながら、じっくり見直す機会となるでしょう。臨床哲学ワークショップは、そうした「じっくりものごとを反省・思考する」(哲学する?!)ための場を提供するものです。

他方このワークショップでは、相手の考えや気持ちを十分に「聴く」ことが求められます。また自分の考えや気持ちを、相手の納得に重点をおいて述べることも求められます。ここには議論や対話、あるいは"interaction"(相互行為)のためのスキルの問題が含まれています。ワークショップを通じて、参加者はこうしたスキルに関するヒントを得ることになるのではないかと思います。

さらにワークショップでは、ものごとを共同で吟味してゆくプロセスが重視されます。集団による思考作業(グループワーキング)を組織し、そこから一定の成果をあげること、それは非常に複雑で骨の折れることです。ワークショップでは、その「プロセス」を体験し反省することに重点をおきます。この意味で、臨床哲学ワークショップは「グループワーキングを考えるグループワーキング」であるとも言えます。

2. あるグループの記録から

さて、以上のような準備をした上でSDが開始されたのであるが、その内容は(特に参加者が出した「例」に関しては)プライバシーに関わることも多いので、原則として公開できない。そこでとりあえず、一つのグループの「問い」と「答え」に関する記録(それは参加者の個人的な問題に触れることはない)を紹介し、SDでの議論がどのような構造を持っているのか、またそこで何が生み出されているのかを考えてみたい。

そのグループでは、参加者からそれぞれ「例」examplesが出され、その中から「他人を理解したつもりになっていた実は理解していなかった」といった類いの経験が選ばれた(実際にはこの例はもっと複雑な構造を持っているのだが、ここでは述べない)。そしてそれらに関連して、次のような「問い」questionsが出された。

1. 他人を理解することは本当にできるのか。
2. そもそも「理解する」とはどのようなことか。
3. 人は他人の何を理解するのか。
4. 他人を理解するための前提条件は何か。
5. 人は何をもって、他人から理解されたと感じるのか。
6. 「人を認める」と「人を理解する」とはどのように違うのか（同じなのか）。
7. 他人への関心が深まれば、それは相手に伝わるのか。
8. 関心が深いほど、それは他人を理解したことになるのか。
9. 他人を理解することには深さがあるのか。あるとすれば、どういうものか。
10. 理解の程度（深さ／浅さ、広さ／狭さ）や種類（質、継続性）とは何なのか。
11. 人を「理解する／理解しようとする」ことの違いは何か。
12. 人はなぜ他人を「理解しないといけない」と思うのか。
13. 人はなぜ他人に理解を求めようとするのか。
14. 人間関係における「理解」の必要性とは何か。
15. 人は理解の「結果」を求めるのか「過程」を求めるのか。過程であるとするれば、どのような過程か。
16. 理解に至るプロセスはあるのか。あるとすれば、それを表現することは可能か。
17. 「他人を理解できない」という状況に対して、人はどのように対処していくのか。

ここで注目すべきなのは、単純に「他人を理解するとは？」という問題から出発しながら、参加者の出す様々な例に促されて、また時々の議論の偶発的な状況に促されて、他者理解にまつわる極めて多様な側面が「問い」として現れているということである。大雑把に分類しても、理解そのものの可能性・意味・条件（1-5）、理解の程度（6-10）、理解の欲求・必要（11-14）、理解の齟齬に伴って問題化する結果・過程・表現・対処（15-17）などを問うものが出た。しかもこれらの一つ一つは、参加者たちが絞り出すようにして出した重い問いである。このような問いの多様性は、おそらく一人の思考では生み出せないであろう。

これらの問いを一つ一つ吟味し、参加者が考えようとしている事柄をすべて議論していくのは興味深いことではある。しかし実際には、これらの多様な論点すべてを一定の時間内で議論し尽くすことはできない。こうした実際的な制約がある以上、グループは何らかの焦点を絞り込んで議論を進めなければならない。そこでSDでは、模造紙三枚にもなる詳細に書き出された「例」に何度も立ち返り、その物語の中にどのような転換点や力点があるのかを話し合いつつ、これらの問いの多様性を取捨選択したり融合するような仕方、グループとして問うべき一つの「主になる問い」main question を作る。

一般に、議論は単なる論点の出し合いや意見の言い合いに終わることが多い。またそうでなくても、誰かの有力な意見が議論を支配してしまうものである。一つの問いを作るという手続きによって、参加者はこうした弊害を避けるとともに、グループとして一定の共有点を獲得するよう

仕向けられることになる。それは確かに骨の折れる作業であるが、ここで参加者は議論を進めることに関するプロセスの難しさを体験する。長い議論の末、グループは次の問いを仕上げた。

・人はなぜ他人を理解しようとする（したいと思う／しなければならぬと思う）のか。

グループは、ごく自然なかたちで「理解における欲求・必要」という論点を共有していった。単に「他人を理解するかしないか、その条件は何か」と問うのではなく、他人を理解「しようとする」ことの問題に焦点が当てられたのである。それは、看護というものに関わっている参加者たちの共通の関心を反映しているのかも知れない。しかしそこには、単なる安易な共通点の確認作業ではなく、すでに展開した多様な論点を自分たち自身で切り捨てるプロセス、あるいは意見の違いを自分たち自身で確認し克服するプロセスが含まれている。実際この問いを作るに当たって、グループは「理解しようとする」という言葉の中に「理解したい／しなければならぬ」という観点の違いがあることを見出し、議論の末、そのどちらも問いの中に盛り込むことで折り合いがついた。

また次のようなことも言える。すなわち、もし参加メンバーが少しでも異なっていたとすれば、たとえ選ばれた例や問いの多様性が同じだったとしても、異なった「問い」が作られたかも知れない、ということである。あるいは全く同じメンバーでも、議論展開の微妙なあやによって、異なった「問い」が作られることもありうる。こうした意味で、上の「問い」は、グループ自身ないし議論自身の固有性を反映している。つまり、議論におけるメンバー間での合意形成というよりは、むしろ「他でもありえたかも知れない」ようなグループ上の個性として、それは生み出される。個別的（個人的）意見の表出でもなく、一般的（他ではあり得ないという意味での）原則の適用でもない、いわばその中間領域に参加者は誘い込まれるのである。

このような中間領域で、参加者は、自分たちの具体的な経験と一定の抽象性をもった「問い」との間を頻繁に往復する。それは密度の濃い「思考」の作業である。そしてSDは、問いに対する「答え」answer という形で、さらにもう一步、この思考作業に一定の成果を与えることを要求する。「人はなぜ他人を理解しようとするのか」という問いに対してグループの出した答えは、次のようなものであった。

1. 人は内面にあるすべてを表出しているわけではない、ということを知っているから。（人は目に見える言動だけではなく、見えない感情の動きに関心を向ける。）
2. 良好な人間関係を保ち、相手の期待に応えたいと思うから。

ここには「他人を理解すること」に関する根拠が明確に示されている。「目に見える言動」の裏側にある「見えない感情の動き」が前提されていなければ、また「相手の期待に応えたい」ということが前提にされていなければ、私たちは他人を理解しようとはしない。これは他者理解に関する、彫りの深い哲学的な洞察である。参加者は、自分たちの経験だけから、そしてそれらの中

に含まれる論点の多様性とその絞り込みのプロセスだけから、この洞察に達した。

ところで、この洞察が一般的に見て「正しい」かどうか、あるいは議論によって個人的な見解に偏らない「妥当な」答えに到達しているかどうかは、差し当たって重要なことではない(もちろんそうした一般的な指標に従ってSDを評価する考え方もあるが、それはSDの本質ではないと私たちは考えている)。むしろ、ちょうど個人が何かを懸命に考えたのと同じように(あるいはそれ以上に)グループ自身が固有な思考を展開したということ、この体験が重要なのである。従って、この洞察を正当に評価しうるのは、その具体的な思考展開に参加した者に限られる。

参加者はSDの中で、自分なりに必至で思考し、それを表現しようとし、また相手の思考を聴き届け、確かめるよう努力する。しかし、そのプロセスの中で生み出されたものは、参加者一人一人には属さない、また参加者の間での単なる意見の一致でもない、それ以上のグループの共同的思考の産物なのである。



ダイアローグのイメージ写真

3. 全体での反省から

他の二つのグループでは、一つの「問い」を作り上げるところまではいったものの、グループとして最終的な「答え」に到達することはできなかった。これもまたSDにはよくあることである。しかしそれは、SDが不成功に終わったことを意味しない。答が出せなかったということは、それだけ参加者が「問い」に踏みとどまって粘り強く議論したことを示している。またSDの後で「なぜ私たちのグループは答を見出せなかったのか」と考える分、答を見出せたグループよりも議論プロセスに関する問題意識は強く残るとも言える。

しかし、それ以上にここで強調しておかなければならないのは、SDが上に述べた「問/答」形式による思考作業以外の様々な効果を持つということである。このことに関して、セッションが終わった「全体での反省」の時間での参加者の発言などを参考にしながら、二点に整理して述べることにしよう。

第一に、「例を語る・聴く」ことの参加者に及ぼす影響がある。特に、自分の例が選ばれ詳しく語ることになった者にとって、この影響は大きい。全体での反省のときには、この例の提供者 example giver から「大変だった」「つらかった」といった感想が出された。このような言葉をどのように考えればよいのだろうか。

S Dでは参加者全員が例を出し合い、選択し、参加者の質疑とともにそれを詳しく書き出し、それについて細かに話し合う。それはある意味で、自分を他人（進行役や複数の参加者）の前に議論の材料としてさらけ出すことであり、また逆に言えば、他人のさらけ出された部分にグループが執拗にコミットしていくことである。そこでは、先に述べた思考作業と並行して、自分の体験を表出すること・他人の体験に触れることに関する配慮と無配慮が微妙に交錯する。参加者は、こうしたやり取りの中で自分や他人と向き合い、ときには自分の中に生じた変化に気づくかも知れない。これらは、論理的な「思考作業」によってもたらされるものとは少し別の効果である。

もちろんS Dは、ある種の心理的効果をねらいとするものではない。むしろ、それをあえて抑制するようなルールを備えている。すなわち「現在引きずっている問題ではなく、過去に“終わった”と思われる経験を例として出すこと」、つまり参加者が自分の経験に対してすでに一定の距離を保てるような例を出すことが望ましいとされる。しかしそれでも「例を語る・聴く」ことから生じる心の動きや変化は避けられない。

なるほど参加者の「大変さ」や「つらさ」を単なる心理的負担と見なすこともできる。しかし、そこで生み出されうる効果についてどのような評価ができるのか、現在のところ私たちは模索中である。歴史的に見れば、最初S Dは大学の哲学者によって「哲学すること」を育成する道具として開発されたものであり、討論によって理性的（論理的）思考を実現するという理念に方向づけられていた。しかし最近では、特に病院や企業などの社会の現場でS Dを積極的に実施しているオランダのグループのように、S Dによる「心の変化」に着目する傾向も見られる。いずれにしても、こうした「理性的（論理的）思考」と「心の変化」の両面にわたる効果を生み出す対話の装置として、S Dの可能性を考えていく必要があるだろう。

第二に「進行役」の果たす効果について。何人かの参加者から、「進行役が議論の流れを立ち止まらせることによって、これまでにないかみ合った議論ができた」という感想が出された。私たちは、ここにまさしくS Dの独自の意義があると見ている。それは、一種のコミュニケーション上の効果と言うべきものである。

進行役は原則として議論の内容に介入しない。むしろ、議論全体の進み方や、個々の言葉のやり取りの中で営まれるちょっとした曖昧さや食い違い、見過ごしに気を配り、議論が行われている最中にそうしたことを指摘する。しかも、議論の本来の在り方を示したり参加者の曖昧さ・食い違い・見過ごしを正すのではなく、ただ参加者にそれを確認させるだけである。例えば「今議論していることは何か」とか「もう少し正確に言うかどうか」とか「別の言葉では」とか、あるいは「あなたの言いたいことを短いセンテンスにまとめるとどうか」といったかたちで議論を立

ち止まらせ、参加者全員が議論に対してできるだけクリアに関われるよう配慮する。

ここで重要なのは、議論の進行や仕方に関して進行役が参加者を「指導する」のではなく、単に「注意を促す」(あるいは気づかせる)に留めるということである。これによって、議論の進行や言葉の交換の問題が参加者自身に投げ返され、それをグループとして再処理するよう促される。進行役は、コミュニケーションの中で頻繁に生じている様々なすれ違いを「直す」のではなく、それをいわばグループ自身に還元する役割を担っているのである。しかもこれが、すべての議論が終わった後の「反省」としてではなく「その場で」なされることによって、議論のかみ合い具合に大きな効果をもたらす。

SDは、こうした「進行役」とともに、議論進行上の工夫として「メタダイアログ」というものを備えている。この意味について述べることはここでは割愛するが、いずれにしても、SDが「議論自身を議論する」ための、そしてそのことによってコミュニケーション効果を高めるための優れた方法であると私たちは考えている。

4. おわりに

今回のSDを、私たちは「うまくいった」と評価している。それはもちろん、学生たちが私たちのワークショップに対して高い関心と理解を示し、積極的に協力してくれたことによる。参加者たちは、今述べた幾つかのSDの効果を何らかのかたちで受け取り、それをどこかで生かしてくれるだろう。最後の「全体での反省」のやり取りの中で、私たちはそう感じた。そして、今後さらに工夫とスキルを加えてSDを続けていく必要があると思った。

最後に、このワークショップを提案していただいた仁平雅子さんに、この場でお礼を申し上げておきたい。仁平さんは、神戸市看護大学の教員であると同時に臨床哲学研究室の卒業生でもあり、私たちの試みているSDに理解を示すとともに、それを実施する機会を与えて下さった。彼女の協力がなければ今回のSDは実現しなかつただろう。今後も連携をとりながら、さらに継続的にSDができればと私たちは望んでいる。

(ほりえつよし)

